

ねじれる人

デパン

ここ最近、Fの身に異変が起きつつあった。腕や足や胴が雑巾を絞ったみたいになじけつつあった。こうした症状は珍しいものではなかった。鬱病にかかるようなもので、周囲の環境にも関係しているだろうが、かかるのはある種の人間に限られたものだった。

身体のあちこちがねじれても日常生活に支障はなかった。手首が否応なく曲げられるとかいうのではなく、間接以外の手首と肘の間とかの肉と骨がコルク抜きのようにらせん状になじけていくのだ。

症状の詳細については医者にまかせ、ひきつづきFの動向について記す。

Fは身体のねじれが日に日に増していくのを感じた。痛みはなかったが、身体がどんどん窮屈になっていくようだった。

Fが服をまもっていても、身体のねじれが手の甲や首などから認められると、途端にFに近づくものはなくなった。もともとFは好かれていなかったが、それでも以前は話しかけてくる者が数人はいた。

職場の同僚や親戚や弟までFに近づきはしなかった。Fは周囲から嫌われていた。この自覚はFにもあったため、自分の身体がねじけていくのは周囲の嫌悪感のためであると考えた。

自分の何が周囲に嫌悪感を抱かせているのか.....？

顔であろうか？ おれの知らないくせがあるとか？ 身だしなみにも気をつけている、振る舞いも下品ではない.....。

一通りの候補を浮かべてみたが、Fにとってはどれも違う気がした。それどころか、周囲の嫌悪感が身体のねじけの原因であるというのが根も葉もない空想であった。

自分の症状について考え、あれこれして間に一週間ほどが過ぎた。身体のねじれは悪化し、痛みを伴うほどにまでなっていた。

Fは部屋でじっとしていたかったが、仕事を休むわけにもいかなかった。その日はとりあえず出勤し、痛みに耐えながらなんとか仕事をやり終え、その後は酒で痛みをまぎらわそうと飲み屋へ酔った。

カウンターに座って酒を煽った。三杯目に差しかかろうとして、Fはふと隣の客に目がいった。客は五十代ほどの男性で手の甲や指がねじけていた。

Fは客をじっと眺めていた。客はそれに気づいてFを見た。そして客は何かに驚いた様子をしてみせ、Fに親しげに話しかけてきた。

「おや？ あなたもだいぶねじれていますね。相当陰口を言ったのでしょうか？ それとも疑う方ですか？」

Fはむっとした。何だかなれなれしく感じたためだった。

客は急に声をひそめはじめた。

「声が大きかったですか？ そう不機嫌にならないでください。私は教師なんですけどね。生徒のやつらはむかつくし、同じ教師たちもくずぞろい、教師としての志も教育のなんたらもわかっていないんですよ。.....ああ、いけない。また愚痴をこぼしてしまった。これ以上ねじけるわけにはいかないというのに」

Fは耳をすませた。

「ちょっといいですか？ 愚痴をこぼすことがねじけの原因なんですか？」

教師は微笑んだ。

「おや、知らなかったんですか？ 私がはじめに言ったこと覚えていますか？ 陰口を言う方ですか、疑う方ですか、と。つまり、陰口と疑いが症状を悪化させるんですよ。いやあ、そうですか。あなたは本当に知らなかったのか。それは大変危険ですよ。医学界は症状の原因が明確でないとか、はっきりしませんが、おおよそ陰口と疑いであることは私自身で確認をとっています」

Fは教師の顔をじっと眺めた。

「あなたは私の言ったことを疑っていませんよね？ 疑うのはよくないですよ。これから何時間かたてば身をもってわかることです」

「そういうあなたが、今ぼくのことを疑ったんじゃないですか？」

教師はグラスを乱暴にテーブルに置いた。

「やめましょう！ 私たちのような人間が集まれば疑いにきりがありませんよ。でもまあ私があなたになれなれしくしたのは許して下さい。私はこの通りねじけているので、生徒も同僚も寄ってこないんです。私はこのところ一人ぼっちも同然だったんで……ああ、あの生徒どもの顔が浮かんでしょうがない。あいつらのため私がそれだけの教育を施してやったと思っているんだ。事件など起こしたやつもいた。あいつらはなんであんなにも愚かで聞きわけがないんだろうというつも思う。きっと、私のように悩んでもこなかったんだろな。あいつらはすべてがちゃらんぽらんなのさ。……いやすみませんね。私はついついこう愚痴をこぼしてしまうんですよ。よかったら、あなたの話も聞かせてください」

Fは教師の姿を見て、自分にはこのみっともない教師と共通している部分があると気づいた。

Fも日ごろから、人々をけなし、さかんに批判をしているのだった。テレビに映る人々にさえ何か気に食わない点がみつかり、テレビに向かって罵声を浴びせていたのだ。その人を深く知っているわけでもないというのに。

翌朝、Fは身体の痛みで目を覚ました。昨夜の教師との会話はFにとって毒だったのだ。身体中がきりきりときしっていた。細い糸できつく縛られたように、今にも肉が切れてしまいそうな気がした。

それからしばらくして、Fは身体中のあちこちがねじ切れて、死んでしまった。

Fが人々を邪推することや、陰口をこぼすことを止めることは無理な注文だった。そもそもFにとっては陰口や邪推が、人々とコミュニケーションをとるほぼ唯一の手段であり、生活の一部となっていたのだ。

おわり